

小学校音楽科学習指導要領の目標を実現 するための教育の在り方に関する一考察 — 学校教育の現場における音楽教育プロジェクト 「宝小プロジェクト2016」の実施を通して —

A Study of Music Education toward Implementing the Objective in Course of Study: Through Music Education Project in Elementary School

十 川 菜 穂
SOGAWA Naho

はじめに

小学校音楽科学習指導要領では目標が設定されているが、これを実際の授業においてどのようにして達成しようとするればよいのか。それを探るため、音楽教育プロジェクト「宝小プロジェクト2016」を立ち上げ、小学校の現場に行き、授業を行った。児童達はそれ以前から音楽を楽しんでいたようではあったが、授業で音楽の真の魅力に触れる機会がなかったように感じられた。プロジェクトで様々な活動を行うと、音楽に対して多大な興味を示し、更に音楽が好きになったという結果を得たことから、学習指導要領の目標の達成に繋がったのではないと思われる。

本論では小学校音楽の学習指導要領を読み解き、プロジェクトでの活動内容を詳しくしながら、それを通して児童がどのように音楽の授業に関わっていったのかを見ていく。またそれを踏まえ、小学校音楽教育の在り方や可能性を考察する。

1 学習指導要領から考える、現代の小学生に求められる音楽的能力

小学校の音楽科学習指導要領ではその目標に「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」とある。「音楽活動の基礎的な能力」とは具体的にはどのようなことなのか。学習指導要領解説には「『音楽活動の基礎的な能力』とは、生涯にわたり児童が楽しく音楽とかわかっていくことができるよう、小学校の段階ではぐくんでおきたい表現及び鑑賞の活動に必要な音楽的な能力のこと」と書かれている。

まずここで、音楽が「生涯にわたり」関わるものであるということが確認される。社会人となってからも音楽が人生と共にあり、一生を豊かに彩る存在であるならば、その人に

とって大変素晴らしいことである。その関わり方は様々で、個人で或いは友達と楽器を演奏したり歌を歌ったりすること、合唱団や吹奏楽団、管弦楽団に所属しての演奏、録音された音楽や実際にホールに足を運んでの鑑賞等だけではなく、将来子供を持った際、歌や楽器を使って育児に役立てたり、家族や地域での活動に音楽を取り入れたりと様々な場面が想定される。そう考えると、目標の「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる」というのが如何に重要な意味を持つかが実感できる。そして「小学校の段階ではぐくんでおきたい」能力とは、上述のような将来の音楽の活動に有効な基礎的な能力である必要がある。もう一つは「表現及び鑑賞の活動に必要となる音楽的な能力」(解説)であるが、それを「表現及び鑑賞の活動を通して」(目標) 培うということである。つまり、音楽の活動とは能力を培う場でもあり、その能力とはその活動に必要なということであるので、音楽の活動と能力の形成は表裏一体であるといえるのではないかな。

では、具体的な能力としてはどのようなものがあるのか。例えば歌唱を行うためにはまず楽譜が読めねばならない。楽譜は、読み方そのものは慣れてさえしまえばさして難しくはないが、最初のうちは初めて見ることに、覚えねばならぬことも多いため、根気よく取り組んでいくことが重要である。楽譜を読まずに教師等から口伝で歌を覚えることもできるが、その際は教師の歌う音高を聴き取り、それと同じ高さの声を発する術が必要となる。実際に声に出して歌うには、正しい発声法を身に付けると同時に音楽的な耳を育てメロディーラインを繋げること、正しい拍節やリズムを感じるには、身体全体で音楽の躍動を捉えることが求められる。器楽の場合は、発声法こそ不要であるものの、上記の読譜や耳等の訓練に加え、楽器を扱い演奏するための技術が要るのは当然である。創作においても何でもありではなくある程度の音楽的な規則や秩序に則って表現できるように注意しながら、自分の音、周りの人の音を聴くということが非常に重要となってくる。

鑑賞の領域でも最も重要なことは「聴くこと」である。BGMとしてではなく能動的に音楽を鑑賞できるということは大きな能力の一つである。どのような雰囲気、性格の曲なのか、それがどのように変化するのかなど、音楽の大きな流れを感じ取るのが第一である。そして美しいものを聴いて美しいと感じることも、感性を育てていくことで獲得できるものである。音楽の3要素である旋律、和声、リズムを総合的に、そして細部まで聴き取り記憶することで、主題や動機が再現されたり様々に変奏されたりした時にそれと気付くと、音楽は更に興味深いものとなる。また、生演奏を鑑賞する際には、曲は勿論のことその「演奏」を聴くという側面が出てくる。このとき、演奏者が今この演奏で何を伝えようとしているのかにまで思いを巡らすことができればなお良い。

このように見ていくと、音楽でまず求められることは「聴く」力ではないか。音楽が音で出来ている以上当然のことではあるが、歌唱でも器楽でも自分が演奏しながら同時に自分や仲間が発する音を聴かない訳にはいかない。反復練習を行う際もその都度向上していくには、演奏しながら耳をよく使い、良かった部分、改善すべき部分等を的確に判断していく必要がある。更に高度な能力が備わってくると、楽譜を見て実際に音を出さずに頭の中だけで聴くということができるようになる。

上述の様々な能力を、段階を追って実際の活動の中で培っていくということである。

2 “宝小プロジェクト2016”での音楽教育

2.1 “宝小プロジェクト2016”とは

前章の内容に則して、小学校の現場で実際に音楽の授業をしながら音楽教育の研究を進めたいと考えていた折り、縁あって都留市立宝小学校の協力を得ることができた。挨拶に伺うと、都留市の中でも町からは少し離れ、山が目の前にあり一面に田圃や畑が広がっている長閑な土地であった。今回協力してもらうのは男子10人女子5人の5年生のクラスで、6月から7月にかけて毎週1回、計6回の授業を行うことにした。また、ゼミの学生に計画を話し、アシスタントとして有志3名が参加することになった。

2.2 授業の様子

・第1回 2016年6月3日

授業詳細、児童の様子等

- ①私と学生が自己紹介をし、これから6回皆で楽しく音楽をすることを簡単に説明する。
- ②児童の名前を一人一人呼ぶと、皆立ち上がり礼儀正しく挨拶してくれる。
- ③校歌斉唱。歌うことは好きなようで、大きな声でのびのびと歌っている。
- ④児童へのアンケートで学校の音楽の授業についての意識を調査する。
- ⑤一人ずつソプラノリコーダーと読譜のレベルチェックを行う。まず既習曲「小さな約束」(イ短調)の前半8小節をリコーダーで吹かせる。児童の全員が指使いをよく覚えて吹いているが、7小節目の八分音符のリズムを正しく吹ける者は一人だけであった。クラス全員が教科書に音名をドレミで書き込んでいた。

次に初見曲(ト音記号、ハ長調、4/4、8小節の平易な曲)の楽譜を見て音読み、お経読み(音高をつけずにリズムどおりに音読み)、視唱をさせるつもりであったが、音読みの段階で、大方の児童は知っているわずかな音を基準に1音ずつ数えながらゆっくりと読んでおり、とてもお経読みや視唱ができる状態ではなかった。つまり、五線内の音符をそのまま位置で把握できていないようである。

・第2回 2016年6月10日

	学習活動
導入	<p>【音列と音読み】①ドレミファソラシドを早口ですらすら言えるようにする。下行ドシラソファミレドも同じように行う。慣れたら一人ずつ言う。</p> <p>②黒板に引かれている五線のト音記号の各cとgの位置に音符を模した円形の磁石を置き次々に読んでいく。</p> <p>③任意に置いた磁石を「ド」「ソ」「それ以外」で次々に読む。</p> <p>④各cとgの2度上下の音、残ったeの音も覚え、3つの音の塊を読む。</p>
発展	<p>「もえろよもえろ」を使って</p> <p>【音読みの実践】⑤楽譜配布。音読みをし、リズムを簡単に確認。</p> <p>⑥お経読み、階名唱。</p>

	【リコーダー】⑦ソプラノリコーダーの音階の指使いの確認後、リコーダーを構えて「もえろよもえろ」を階名唱しながら指使いを練習。
まとめ	【リコーダー】⑧「もえろよもえろ」をリコーダーで演奏。

授業詳細、児童の様子等

- ①上行は比較的スムーズだが、下行は一音ずつ考えながら言うなど覚束ない児童が多い。
- ②～④ゲーム感覚で読んでいき、何周もするうちに五線内と下線1本程度の音はすらすらと読めるようになってくる。
- ⑤たまたま1週間ほど前の林間学校で歌ったとのことであったが、題名や歌詞のない楽譜を見ただけでは誰も何の曲から分らなかった。驚いたのは「音を読んでみましょう」と言った途端に何も指示していないのに全員が鉛筆を出そうとしたことである。「皆さんはもう大分読めるようになったのだから、今回は音の名前は書きません」と言うと、納得して楽譜に向き合った。訓練の成果があり、かなりすらすら読めるようになった。リズムは次回詳しく学習することになっているため、ここでは簡単にしか触れないことにする。
- ⑥お経読み、階名唱は私達が手伝いながらできた。ここで初めて曲名が分かったようだ。階名唱は何度も繰り返し、自然に歌えるようになった。
- ⑦児童の8割は指使いがほぼ頭に入っている。階名唱をしながら行うことで、ドレミの音名、音高との一致とリズムを確認できた。
- ⑧今回の仕上げとして実際に演奏する。まだ指がスムーズに動かない児童もいる。

・第3回 2016年6月17日

	学習活動
導入	<p>【基本的なリズムの理解】①全音符、二分音符、四分音符、八分音符、付点二分音符、付点四分音符、全休符、二分休符、四分休符を確認。</p> <p>②上記リズムが4/4、1小節分に組み合わせられて書かれた様々なカードを見て、拍を声に出して数えながらリズムを叩く。</p>
発展 まとめ	<p>【リズムの実践～全員で大きな輪になって】③拍回し：一人1拍ずつ順番に手で拍を叩いていく。拍は色々な速さに変えて、また2拍ずつ、4拍ずつでも行う。</p> <p>④リズム回し：4/4、1小節分のリズムを叩いて回す。私が輪の途中に入り新しいリズムに変えると、そこからそのリズムを回す。</p> <p>⑤リズム創作リレー：一人が4/4、1小節分の任意のリズムを叩く。隣の人はそれを真似して叩き、引き続き自作のリズムを叩く。その次の人は直前のリズムと自作のリズム…というようにリレー。</p> <p>【合奏】「もえろよもえろ」⑥リコーダーで練習。</p> <p>⑦合奏の楽譜配布後、パート分けを発表し、パート練習を行う。</p>

授業詳細、児童の様子等

- ①二分音符、四分音符、八分音符は名前、音価など知識として持っている児童も数名いた

が、実際にどう演奏されるかまでは実感できていないようである。

②簡単なものから始めて「付点四分音符+八分音符」の入ったものまで色々やってみる。最初はカードを黒板に貼り、拍を数字で書いて視覚的にも分かり易くする。大声で拍を数えながら叩くことを徹底して練習していくうちに、次々と捲られるカードにも対応して止まらずに叩けるようになってきた。

③拍を皆で共有するための練習。一人で完結しないで、流れの中で次の人に拍を回していく感覚を大切にするように指導。簡単なようで案外難しいものである。

④⑤声に出して拍を数えるようにする。

⑥リズムの創作は楽しそうではあったが、初めての児童達にとっては4拍子の拍節に乗って叩くこと、前の人のリズムを一度で聴き覚えて再現することはまだ難しいようである。

⑦前回の続き。少しずつ上達していくのが目に見える。

⑧合奏はリコーダー、鉄琴、木琴、鈴、カスタネット、木魚、大太鼓、ピアノによる。初回アンケートの音楽的嗜好、経験、興味のあり方などを読み込み、前2回の児童の様子や性格を思い出しながら学生3人と話し合っ、予めこちらでパート分けを行っておく。このパート分けについては担任の上田先生から、一人一人の特性に合った素晴らしいものと称賛を頂く。各パートに一人指導者をつけ、第2・3回の音やリズムの読み方を応用させてパート練習を行う。

・第4回 2016年6月24日

	学習活動
導入	【読譜】①「Frère Jacques」(ハ長調)の楽譜を配布。楽譜を見て一人ずつ気付いたことを発表させる。 ②音読み、お経読み、階名唱を全員で行う。
発展	【カノン】③カノンについて説明し「Frère Jacques」を2、3声のカノンにする。 【合奏】「もえろよもえろ」④リコーダーの練習。 ⑤前回に引き続きパート練習を行う。
まとめ	【合奏】「もえろよもえろ」 ⑥初めて全体で合わせてみる。

授業詳細、児童の様子等

①歌詞のない楽譜を配布する。楽譜を見て気付いたことを発表するように言うが、数人を除き何を言って良いのか分からないようである。担当の先生や学生にも色々なことを発表してもらい、どんなことでも良いからと促し漸く最低一人一回の発言に至る。拍子、音符、リズム、楽語や各種の記号の他、フレーズ構成等に触れる児童もいた。下第2線のgが分からないとの或る児童の質問に、分かる児童が自発的に挙手して説明した。

②今回はお経読みの時点で何の歌か分かる児童が出てくる。今の子供は「グーチョキパーで何作ろう」という歌詞で知っているようであるが、原曲はフランスの童謡であることと歌詞の内容を簡単に説明する。皆できれいに歌えるようになってきた。私は木琴でcと4度下のgを交互に鳴らし伴奏する。

- ③カノンについて説明する。①で各パートの歌い出す番号が付されていることに誰も触れなかったので、数字の意味と歌い方を説明する。私と児童達の2声で、またクラスを2つに分けての2声でカノンにする。慣れてきたら3声にも挑戦する。
- ⑤各パートを回ると学生が自分なりにやり方を考えて指導している。
- ⑥まだ自分のパートが上手く演奏できない児童もいるが、どういう響きになるのか全体像を把握するために全員で合わせてみる。2週間後にはお客さんの前で発表するのだと意識を持たせ、更に次回も練習を重ねることにする。

・第5回 2016年7月1日

	学習活動
導入	【譜読みの確認】①初回の譜読みチェックの初見曲を板書し、拍を数えながらリズム叩き、音読みを皆で行う。
発展	「Frère Jacques」を使って 【カノン】②4声のカノンを完成させる。 【長調と短調】③ハ短調に移旋して歌って聴かせ、感じたことを発表させる。それから実際に歌ってみる。 ④ここで扱った「もえろよもえろ」「小さな約束」についてどちらか考えさせる。
	【合奏】「もえろよもえろ」⑤リコーダーの練習。 ⑥パート練習を行う。
まとめ	【合奏】⑦全体練習

授業詳細、児童の様子等

- ①毎週の授業で少しでも読譜の力が付いてきているか確認してみる。リズム叩きはまず一度やってから、気をつけるべき所を少し注意しただけで、全員きれいに揃ってできた。音読みは跳躍のある所などまだ迷いもあるが、初回と比べ随分上達が見られた。
- ②いよいよ4声のカノンにする。4声にすれば必ずどこかのフレーズをどこかのグループが歌っていることを説明する。そして、歌いながら4つのフレーズが縦に重なって響いているのをよく聴くようにと指導する。実際木琴のc-gのバスに乗って、クラスの歌声は美しく調和していた。
- ③同じバスを叩きながらハ短調で歌って聴かせると「変だ」「気持ち悪い」といった否定的な意見が多く出た。今回は慣れ親しんだ歌が移旋されたためこのような意見が出たものと思うが、マーラーの交響曲第1番第3楽章にこの短調版が使われていることを木琴で示し、短調が決して異常なものではないことを説明した。しかしやはり実際に歌ってみると「歌い難い」「難しい」という感想が挙がった。
- ④長調と短調の音階や和音を木琴で聴かせると、児童自身の複数の口から「長調は明るく短調は悲しい」という意見が出たため、各曲を歌ってからそれに沿って考えさせることに

した。「もえろよもえろ」は皆長調と答えたが、短調である「小さな約束」は意見が二分した。最後のⅠ度を木琴で分散和音にして聴かせると、長調派も短調だと納得した。つまり、歌ったり笛で演奏したりしている時、頭に和音が鳴っていなかったということである。

⑤⑥毎回の練習の成果が見え、大分上手になってきた。

⑦次週の本番に向けて、楽器の持ち替えによる演奏順序等を確認する。

・第6回 2016年7月8日

学習活動
【発表会練習】①通し稽古 ②人前で演奏することについての指導
【発表会】③ (1) 校歌斉唱 (2) 「Frère Jacques」4声のカノン (3) 「もえろよもえろ」合奏
【終わりのアンケート等】④

授業詳細、児童の様子等

①本番当日、児童達はいつもどおりで特に緊張している様子もない。担当の教師、学校長、教頭の3名の先生方に聴いてもらうことになった。

②本番に臨む心構えとして、自分達が演奏する曲が如何に素敵な曲なのかを聴いている人に演奏で伝えること、クラス全員で気持ちを一つにして演奏すること等を話す。

③今までで一番良い出来で、そこにいる全員が大変満足した。

④本プロジェクトでどのような上達が見られたか等を5段階評価で答えさせる。また、プロジェクトの感想を自由に書かせる。

2.3 児童アンケートの考察

・最初のアンケート

プロジェクト開始時のアンケートは全児童15名の回答を得た（稿末資料グラフ集1）。まず好きな教科を順に3つ書かせたところ、音楽を挙げた児童は8人であった（外国語は現段階では教科ではないが、記述式の回答で挙げたため表に含めた）。

	国語	算数	理科	社会	音楽	図工	体育	家庭	外国語
1位票	1	3	1	0	2	3	4	0	1
2位票	2	2	2	0	4	1	3	1	0
3位票	1	0	0	1	2	2	2	2	5
点数	8	13	7	1	16	13	20	4	8
順位	5	3	7	9	2	3	1	8	5

1位票を3点、2位票を2点、3位票を1点で計算すると、好きな教科第1位が体育、第2位が音楽、第3位が算数と図工となり、やはり実技教科の人気の高いようである。

音楽の授業について「歌うこと、リコーダーや打楽器の演奏が好き」に対して「そう思う・ややそう思う」が7割以上を占めた。「級友の前で歌ったりすることが恥ずかしい」

には「全然／あまりそう思わない」が「そう思う・ややそう思う」の2倍であった。少人数級で仲が良く、子供らしい素直な児童達だというのが窺える。

一方、土地柄が実際に音楽に関する習い事をしている、若しくは過去にしていた児童は2割に止まった。児童の多くは学校の音楽でしか楽譜に触れる機会はないようである。

・終わりのアンケート

6回の授業を終え最終日に行ったアンケートでは欠席の児童1名を除く14人の回答を得た(稿末資料グラフ集2)。ここでは児童達の達成感がよく表れる結果が出た。学習した項目の全てについて「前よりできるようになった」に8割近くの児童が「そう思う」と答えている。「音楽の授業が前より好きになった」には86%が「そう思う・ややそう思う」と答えた。「今回の6回の授業は楽しかった」には「ややそう思う」と答えた1名以外全員が「そう思う」であった。また「今回の6回の授業は難しかった」には43%が「普通」、同じく43%が「全然／あまりそう思わない」、14%が「そう思う」であったことから、授業の楽しさと難しいと思うかはそれほど関係がないようである。

プロジェクト全体の感想としては「楽しかった」「楽器が上手になった」「色々なことを知り得た」等の他「合奏や歌を通じてクラスがまとまった」「皆が仲良くなった」との記述が複数あった。今後について「もっと色々な曲や楽器を演奏したい」「さらに勉強をして音楽の様々なことを知りたい」等意欲の高まりが認められた(稿末資料児童感想文)。

2.4 宝小5年生の音楽能力の現状と今後の課題

実際に授業を行って、児童達は小学校で真面目に楽しく音楽の授業を受けてきたことが察せられた。今回は45分授業×6回という限られた時間の中で様々な項目を盛り込み、同時に合奏を仕上げるというハードなプログラムであったため、各項目を複数回に亘って扱うことは殆どできなかった。その上今の児童達には少し高度な内容もあったが、素直な彼らは拒否反応を起こさず全て受け入れて楽しんでおり、今後も継続して取り組んでいけば着実に力が付いていくであろう様子が見られた。

これまで真の意味での「音楽の魅力」に接することのなかった児童に対し、この魅力を伝えていくことが重要である。そのためには、今回の授業を通じて児童達に伝えたこと、すなわち、よく聴くこと、自分で表現すること等の活動を通じて、その魅力に気付かせていく必要がある。実際には、そのことを実現するためには児童の一定の能力の向上を図っていくことが不可欠である。

彼らの今後の課題として、読譜力の向上と並び、先述の音楽の3要素をバランス良く身に付けることが挙げられる。そのうち旋律と和声については、学習指導要領に「相対的な音程感覚を育てる」と示されており、それにはある音から次の音への幅の感覚を養う必要がある。例えば長調の音組織の中でドレ、ドミ、ドファ…、そしてレミ、レファ、レソ…といった音程感覚を身に付ければ、調性という背景で調和する音程で歌えるようになるだろう。そして複数の声部で和音やカデンツを歌い和声感を育てていけば、今回はカノン止まりであったが今後はより複雑な合唱に生かしていける。最後の要素のリズムについては、書かれたリズムの理解と創作を含む実践の2本立てで力を付けていくのが良い。今回行ったリズムの根幹の拍回しのようなものを毎回少しずつ行えば、音楽の進んでいく自然

な拍感が育っていく筈である。その感覚は全ての音楽の基本となるものであり、先に触れた、聴くということにも大きく関わってくるものである。

3 今後の音楽教育への展望

3.1 参加学生の感想の考察

今回プロジェクトに参加した3人の学生にも、終了時に感想等を書かせた。「小学生に音楽を教える上で大切なことは何か」という設問には全員が楽しさを感じさせることと答えている。音楽は表現であり人間としての自然な行為であるから当然である。具体的には「音楽って楽しい！分かって演奏するのは楽しい！と思わせる」「得意不得意に関わらず皆と一緒に楽しめる音楽を創る」との記述があった。児童に楽しさを感じさせるには、やはり教師本人が楽しんでいることが不可欠であり、そのためには教材の楽曲を深く理解した上で入念に授業の準備をし、ストレスなく授業に臨まねばならない。音楽そのものの持つ魅力やエネルギーを感じる、皆と一緒に音楽を作り上げる、歌や楽器の演奏が上手くいく等様々な種類の楽しさを味わわせていけると良い。

また「音楽に対する児童の意識が予想外に高かった」との記述からは、高学年になり精神的にも成長し、今まであまり耕されていなかった分野に触れ興味を抱いている様子が窺える。教師はこの興味を大切に、更に音楽的に豊かな活動へと導いていく必要がある。

3.2 教師に求められること

今一度学習指導要領の目標を振り返ってみると「音楽に対する感性を育てる」という文言がある。一般に、音楽に対する感性は大人になってからも高めることはできるが、小さいうちから育てていくべきものとされている昨今、児童に実際に授業を行ってみて、小学校教師に求められる期待は非常に高いと感じた。また、教師が如何に優れた教授法を作り上げたとしても、教師本人が音楽を心から敬愛しておらず、音楽に事務的な態度で接していれば、子供に「音楽を愛好する心情」を持たせることなど到底できるものではない。

全教科を教える小学校教師の中には、実技科目である音楽に苦手意識を持つ者も少なくないが、諦めずに努力を続けて自分なりに少しずつでも進歩していくことが大切である。そうすれば基礎的な能力を培うことを生涯に亘り実践していることで、児童にも熱意が伝わり希望を持たせることもできる。小学生にとって教師がこのような態度を見せるのは教育上大変有効であるといえる。

尚、昨今全国の音楽の授業において歌唱伴奏に既成の録音を流すのが主流となっているが、生のピアノ伴奏に勝るものはない。多少拙くとも音楽の自然な息使いが伝わる生きた伴奏の方がどれだけ児童の心に響くであろうか。歌っている児童の様子を見るためとのことであるが、少しの努力やピアノの配置の工夫でそれは十分に可能である。児童と教師との演奏によるコミュニケーションの機会が失われるのは非常に残念である。

元々音楽が好き、また得意な教師は、その気持ちを目の前の児童に伝えようとするれば良い。例えば実際に演奏してみせる際は、たまには如何にそれが美しいか、気持ちが良いか、人の心に訴えかけるのかを全身を使って多少大袈裟に表現してみせることもできる。

こんなに表現して良いのだと子供に思わせ音楽に対する心を開かせることができればしめたものである。各学年の目標の「音楽表現の楽しさを感じ取る（1～4年生）、喜びを味わう（5,6年生）」は目前である。教師にとってはどのような授業を行うか、どんな教材を使うか等、方法は無限にあるが、クラスの児童に見合った授業を展開できるよう、愛情と責任感を持って授業計画を立てることが重要である。

3.3 終わりに

芸術の一ジャンルである音楽を勉強することで得られるものは音楽だけに留まらず非常に多岐に亘る。音楽による表現を通して、自己を開放し表現する術が学べるのはいうまでもない。また美への感性が高まり、美しいもの、貴重なものを愛で大切にすることが養われることで、知性と感性のバランスの取れた人格が形成されるものである。

そして先に触れた、音楽の最大の特徴である「聴く」ということも音楽以外でも大いに役立ってくる。自分だけでなく相手の声や音に耳を傾けるのは実生活においても重要であり、互いに尊重し合える人間関係を築けるようになっていく。これらのことを小学生の時期に身に付けていくことで、今後社会の中で人々と関わりながら自分の道を逞しく切り拓いていく「生きる力」を培うことができるものである。これこそが芸術のもたらす最大の恩恵なのである。

最後に、私の思いをたった100字で見事に言い表している一人の児童の感想文を引用し終わりの言葉としたい。「一番音楽がすばらしいと思ったのがみんなの気持ちやみんなのキズナです。音楽がきもちよくなるのは、みんなの気持ちがかさなった時だとぼくは思いました。そしてキズナがつつたわるとすごく音楽いがいでも楽しくなります。」

謝辞

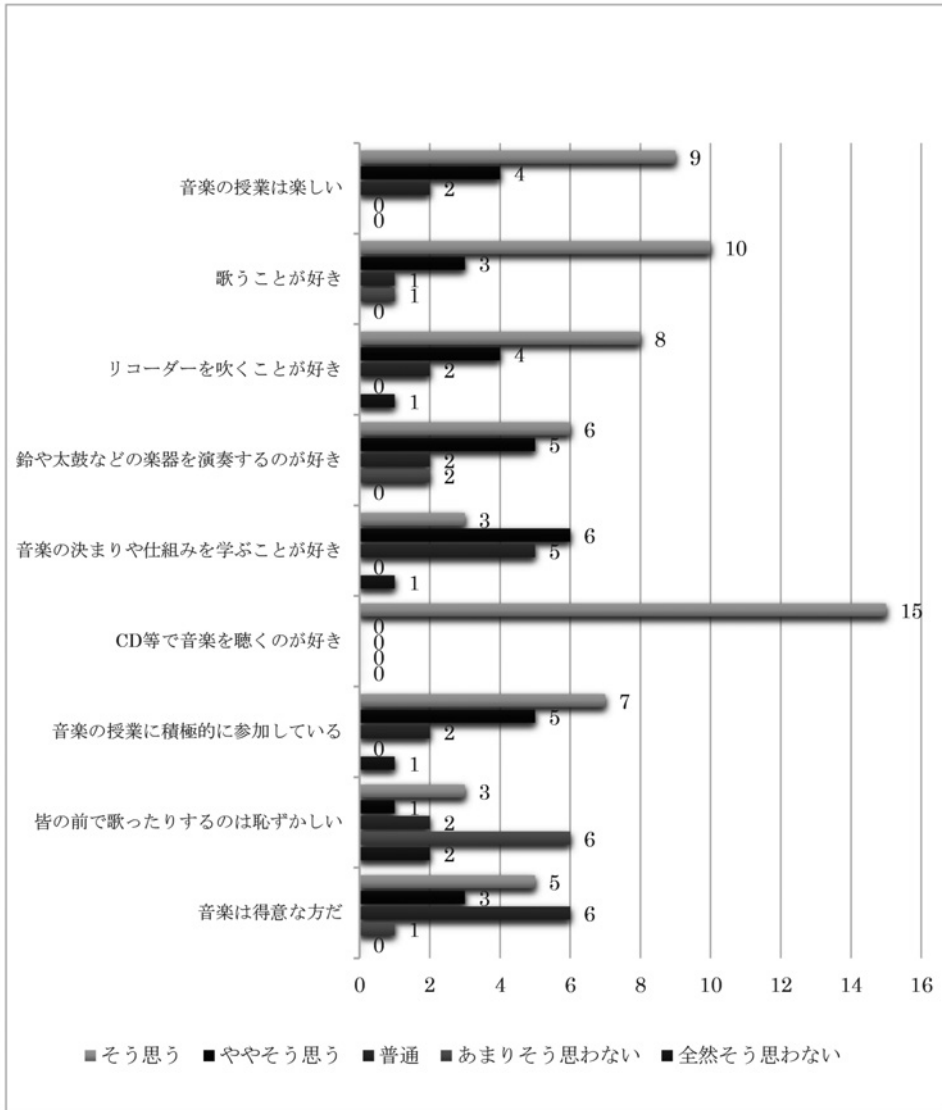
都留市立宝小学校の皆さん、とりわけ校長小俣一夫先生、5年担任上田ゆきみ先生、そして音楽と一緒に楽しんでくれた5年生の15人の皆さんに深謝申し上げます。また、プロジェクトに参加したゼミ生、藤原雄一郎、淵上真穂、吉村優希の3名にも感謝します。

参考文献

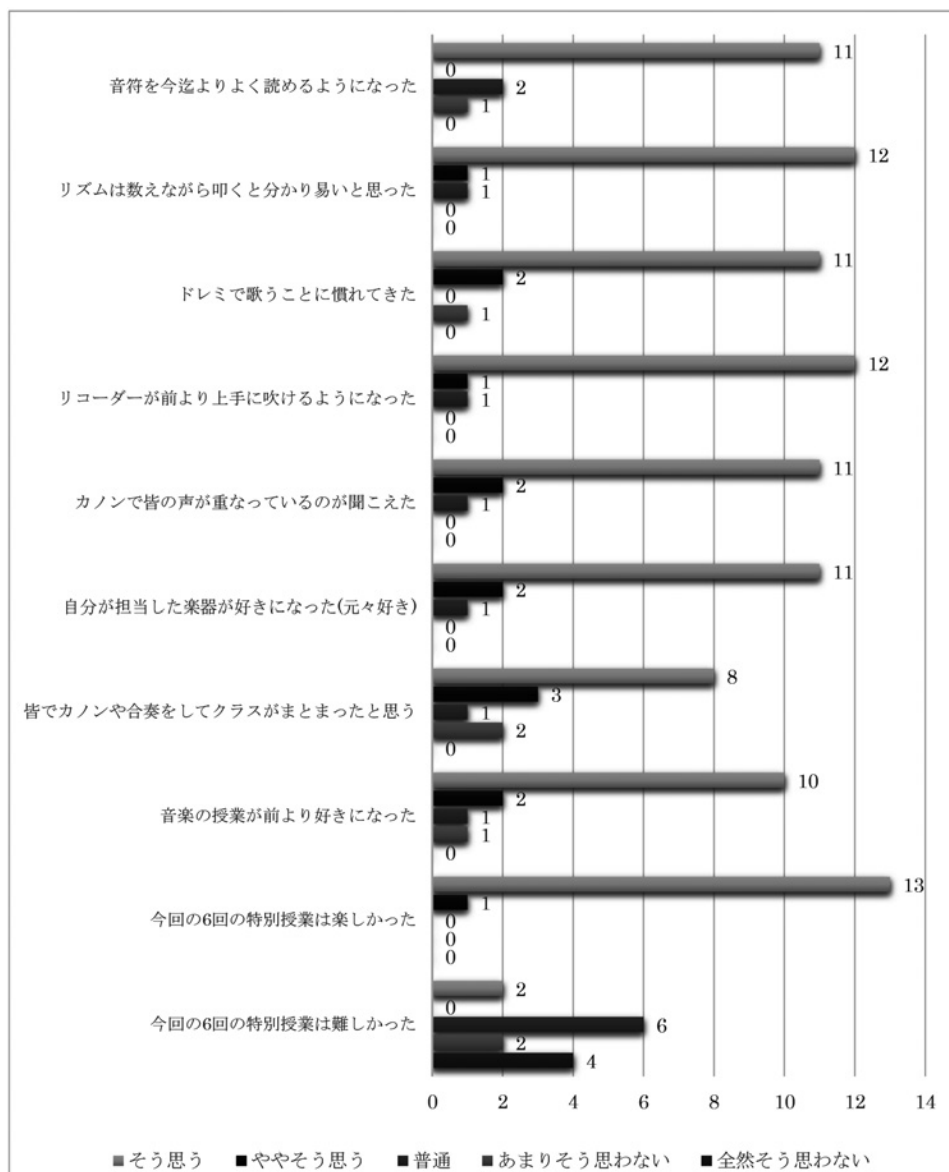
文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』、教育芸術社、平成20年

稿末資料

グラフ集 1, 2
児童感想文抜粋



グラフ1 設問に対する児童の回答



グラフ2 設問に対する児童の回答

最終は頑張ろうしていたけど、本当に悔しくて涙が止まらなくなりました。音楽や楽器の楽しさを知ることができて良かったです。それにすぐカスタネットは作って思っていたけど、作っているうちに楽しむことができました。

クラスのみんながこんなに楽しんでいると思いました。いろいろな楽器をやりたくなります。

今日の音楽の特別授業は、とても楽しかったです。よく頑張った事ができました。鉄琴も楽しかったです。リコーダーもとても音が可愛いです。私は、音が大好きで、本番で練習してきて、すごくよかったです。みんなで歌うのが好きです。リコーダーでも、もっとたくさん練習したいと思いました。鉄琴も、楽しかったので、もっとやりたいと思いました。

一番、心に残ったことは最後の合奏です。この6時間でクラスのみんなもよく頑張りました。先生たちとも仲良くなれてよかったです。いつも音楽が楽しくてよかったです。先生たち全員、ありがとうございました。

リズムもうちやリコーダーも全部楽しかったです。さすがにカスタネットがたのしかったです。最後にリコーダーがぜんぶ、ふけてよかったです。

みんなが楽しかった。楽器が好きになった。(木琴)
音楽がおもしろくなってよかった。
楽奏がうまくいってよかった。

木琴は初めてだったので、練習がむづかしくてよかった。音楽はもっと好きになりたいです。みんなは鉄琴を弾きたいです。みんなが音楽が大好きです。

今日はみんなが楽しんでくれました。リコーダーも、前より上手になりました。みんなが楽しんでくれて良かったです。リズムも、もっと上手になりたいです。

リコーダーは、すごく上手にできて、たのしかったです。自分で作った曲が、とても好きです。みんなも、よく頑張りました。音楽が、とても楽しいです。

鉄琴が、おもしろいと思いました。みんなも、楽しんでくれました。音楽が、とても楽しいです。みんなも、よく頑張りました。

今日は、とても楽しかったです。みんなも、楽しんでくれました。音楽が、とても楽しいです。

今回、面白い時間とおもしろい時間があったので、みんなも、楽しんでくれました。

図1 児童の感想文抜粋

Received : October, 5, 2016

Accepted : November, 9, 2016